

# 中国語における「被○○」構文について<sup>1</sup>

## —認知言語学と対照言語学の視点から—

穆 欣<sup>2</sup> 駱 牛牛<sup>3</sup>

### Abstract

The present study discussed the features of the newly appeared structure “Bei ○○” in modern Chinese language by treating “Bei ○○” as a “construction” (Goldberg, 1995). We compared the construction “Bei ○○” with the direct passive in Chinese and passive forms in modern Japanese, and analyzed the distinctions using theories of construction and non-categorization. We found that there are several distinctions for components and meanings between the construction “Bei ○○” and the direct passive in Chinese. “Bei” has undergone grammaticalization and has turned into a passive marker with neutral connotative meaning in modern Chinese. However, in the construction “Bei ○○”, “Bei” can no longer be interpreted as a simple passive marker. The “Bei” in the construction “Bei ○○” can be used with verbs (both transitive and intransitive), nouns, adjectives, and even verbal phrases while the simple passive marker “Bei” is strictly used with transitive verbs. Normally a passive sentence in modern Chinese can be changed into an active sentence without changing of the meaning, but such transfer can not be applied to the construction “Bei ○○”. Each “Bei ○○” also contains quite complicated meanings and strongly requires context to explain the meaning of the structure. According to the context or background information, “Bei ○○” may imply “false information”, “someone did something unwillingly”, or mean more than just passive but specifically shows the proposition that is represented by “○○” is not true. On the other hand, by comparing the construction “Bei ○○” with passive forms in modern Japanese, we found that the “someone did something unwillingly” meaning of “Bei ○○” shares almost the same meaning as “causative-passive” while the other two meanings have no equivalents in Japanese. We also suggested that the mechanism of how context and background information is embedded into the “Bei ○○” construction differs from the “third-party passive” in Japanese.

### 1 はじめに

近年、中国語においては、「被自杀」「被幸福」「被高铁」「被代表」「被精神病」などの「被○○」パターンを取る表現が数多く現れてきている。直接受身と異なり、これらの表現は単に「- (r)

<sup>1</sup> 中国語の文献では「被○○」のような表記ではなく、「被××」のように表記されるのは一般的であるが、日本語では「○○」が多用されるので、本研究では「被××」を「被○○」に表記する。

<sup>2</sup> 山口大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、名古屋大学大学院に進学。今現在、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程に在籍している。本研究の中国語部分の加筆、日中対照部分および原稿翻訳の分担者である。

<sup>3</sup> 2012 から 2013 年までの一年間、交換留学生として山口大学に留学。その後、山東大学の博士号を取り、今現在、山東師範大学国際交流学院常勤講師を務めている。本研究の中国語部分の分担者である。

are」を使って日本語に訳すことができない。文脈や背景情報などを含めて訳せば、それぞれ「被自杀」は「自殺を余儀なくされる」、「被幸福」は「（実際に幸せではないのに）幸せだと言われたり、報道されたりしている」、「被高铁」は「（ほかの交通機関を利用することができないことによって）高速鉄道に乗るのを余儀なくされる」、「被代表」は「（自分自身の感想や意見ではないのに、他人に）勝手に（自分のことを）代弁される」、「被精神病」は「（精神病にかかっていないのに）精神病だと言われたり、精神病患者扱いされる」という意味となる。

このような表現に対して、一部の研究者は、「被〇」単語集団<sup>4</sup>と名付け、一語として扱っている（たとえば、何洪峰・彭吉軍 2009、劉雲 2010）。他方、従来の受身表現から「派生」してきた新しい受身表現として扱う研究者もいれば（たとえば、丁力 2011、楊炎華 2013）、一語でも新しい受身でもなく、単に「被〇〇」式、あるいは「被〇〇」構文として扱う研究者もいる（たとえば、陳博文 2010、施春宏 2013）。

本研究では「被〇〇」を構文文法上の「構文」(construction)として扱う（以下は、「被〇〇」構文と記す）。構文について、Goldberg (1995) は「C is a CONSTRUCTION iff<sub>def</sub> C is a form-meaning pair <F,S> such that some aspect of F, or some aspect of S, is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions」(C は形式と意味の結合体として、各構成要素または従来の構文から、C の意味または形式を予測できなくてはじめて、C を構文とみなす)と述べている。つまり、形式と意味は文全体の意味を成す要素として、形式と意味のどちらかから、またはすでに存在している「構文」から、文の意味を推測できない場合、文全体を一つの構文として扱うことができる。Goldberg (1995) の定義にそって分析すれば、受身標識の「被」だけで、あるいは「〇〇」部分の意味だけで、「被〇〇」の意味を予測できないため、構文として扱うことにする。

本研究の主たる目的は、認知言語学における「構文」に関する理論および「カテゴリー」に関する理論を用いて、中国語の「直接受身」構文および日本語の受身表現と対照しながら、「被〇〇」構文の特徴を分析することである。具体的には、第2節では「被〇〇」構文と「直接受身」構文の構成要素上の相違、第3節では「被〇〇」構文と「直接受身」構文の意味上の相違についてそれぞれ取り上げて検討する。第4節では日本語の受身表現と比べて、「被〇〇」構文の特徴について検討を加える。

## 2 「被〇〇」構文と「直接受身」構文の構成要素の相違

早い時期に「於」「為」「見」は古典中国語の主な受身標識として使われていた。「被」は受身標識として初めて現れたのは春秋時代以降である。戦国時代末期から漢の時代にかけて、「被」は受身標識として徐々に使われはじめていた。しかし、南北朝時代以前、「被」と述部の間に、動作主(agent)の挿入が許されていなかったのである(王 1980 参照)。例えば、次のような例がある。

### (1) 萬乘之國，被圍于趙。(戰國策・齊策)

燕国(万乗の国)が(趙国に)囲まれた。<sup>5</sup>

### (2) 被戮辱者不泰迫乎?(漢書・賈誼傳)

<sup>4</sup> 原文の中国語の用語は「词族」である。ある類の表現の塊や集合のことを意味する。

<sup>5</sup> 本研究での翻訳は、特に説明がなければ、第1著者によって訳されるものである。下線も著者によって引かれるものである。

刑罰に処せられた者は帝の側近ではなかろうか。

唐の時代以降、次のように「被」と述部の間に動作主の挿入される文が多くなってきていた。

(3) 王曰“吾居此官，慮被人呼為‘不解作詩王右丞。’” ) 載 傳 唐 大 (

王維は「私はこの官位を授けられ、人に『作詩がわからない王右丞』と呼ばれるのが心配である」と言った。

(4) 夫子嵇阮流，更被時俗惡。( 杜甫·有懷臺州鄭十八司戶 )

鄭虔(夫子)は嵇健(嵇)と阮籍(阮)のように人に嫌われていた。

現代中国語における「直接受身」構文は、唐の時代以降の使い方を踏襲している。すなわち、「直接受身」構文においては、動作主の挿入が可能である。例えば、次のような例が見られる。

(5) 正确的思想，一旦被群众掌握，就会变成改造社会、改造世界的物质力量，实现由精神向物质的过渡。(毛泽东·《人的正确思想是从哪里来的》)

正しい思想は、国民に身につけられると、社会や世界を改造する物質的な力となり、精神から物質への移行を成し遂げる。(毛沢東・「人間の正しい思想がどこから来たか」)

(6) 随后，他们和妈妈被大家簇拥到了电话机前(后略)(中国青年报 1992.5.26)

その後、彼らと母はみなさんに電話機の前まで押し進められた(後略)

(中国青年新聞 1992. 5. 26)

言うまでもないことであるが、「直接受身」構文における動作主は、日本語や英語と同様に、強制的に出現するものではない。例えば、次のような例がある。

(7) 当晚的宴席有 10 多桌，估计被宰杀的穿山甲有 5 只以上。(中国青年报 1991.6.4)

その日の夜の宴には、10 テーブルもあり、殺されたセンザンコウが 5 匹以上あるかもしれない。(中国青年新聞 1991. 6. 4)

(8) 当他救出 10 名群众后，得知有一名要参加高考的女学生还被困在一幢楼上，他立即撑着小船赶去。(中国青年报 1992.7.20)

10 人救出した後、一人の大学入学試験を受ける女子生徒が建物に取り残されたのを知った彼は、直ちに小船を漕ぎ、助けに行った。(中国青年新聞 1992. 7. 20)

以上の例文から、現代中国語の「直接受身」構文は、以下のような特徴を持つ。

ア. 受身標識は動作の前に来る。また、述語は他動詞であり、自動詞・名詞・形容詞は述語にならない。

イ. 受身標識と述語の間に動作主の出現は強制的ではない。省かれてもよく、補われてもよい。

(7) の場合、「估计被饭店宰杀的穿山甲」(店の人に殺されたセンザンコウ)、(8) の場合、「得知有一名要参加高考的女学生还被洪水困在一幢楼上」「一人の女子生徒が洪水によって建物に取り残される」のように、それぞれ動作主を補うことができる。

しかし、「直接受身」構文と異なり、「被」と「○○」によってなされた「被○○」構文は、以上の二つの特徴は多かれ少なかれ変化してきている。まず、一つの特徴として、以下の例文で示したように、「○○」部分は他動詞だけでなく、自動詞・形容詞・名詞の出現も許されている。

(9) 男子被警方带走后死亡 家属质疑“被自杀”。(腾讯网 2009.9.6)

男子が警察に連れて行かれてから死亡 遺族は「自殺を余儀なくされた」のではないかと疑問視(騰訊網 2009. 9. 6)

(10) 视频网站被劫持 众网友“被广告”。( 新华网 2010.5.18 )

広告の溢れる動画サイト インターネットユーザーが (見たくなくても、仕方がなく)  
「広告を見せられる」(新華網 2010. 5. 18)

(11) “被富裕”的人觉得自己生活在一个很二级的城市，却拿了个一流的头衔，觉得很冤；而“被贫穷”的人呢，觉得自己原本高高在上，名列前茅，但是却不幸落榜了，简直也像个冤大头。

( 新浪博客 2010.12.17 )

「富裕層扱いされた」人は、大都会に住んでいないのに、富裕層だと言われると、不本意だと思っている。それに反して、「貧困層扱いされた」人は、上に立っていると思っているのに、言及もされなく、カモにされたと思っている。(新浪ブログ 2010. 12. 17)

(9) における「自杀」は自動詞で、(10) における「广告」は名詞で、(11) における「富裕」「贫穷」は形容詞である。例 (9) ~ (11) から見ると、「直接受身」構文では受身標識の後に来られない自動詞、名詞、形容詞が、「被○○」構文では受身標識の後に来ることができるようになっている。ウェブ検索および辞書類検索<sup>6</sup>の結果、81 例の「被○○」構文の中に「被」の後に他動詞が来る例が 15 例 (19%) しか見られなかった。残った 66 例 (81%) が自動詞、名詞、形容詞および動詞句 (VP) によって占められている。一部の例を品詞ごとに以下の表 1 に示す。

表 1 「被○○」構文の品詞別の例

他動詞	被录取 被代表 被培训 被通过 被统计 被赞成
自動詞	被自杀 被下降 被吸毒 被订婚 被捐款 被井喷
名 詞	被韩国人 被中产阶级 被心脏病 被网瘾 被广告 被全勤
形容詞	被高尚 被繁荣 被富裕 被幸福 被寂寞 被健康
動詞句	被涨工资 被用水

「直接受身」構文の視点から見ると、明らかに非文法的な「被○○」構文の成立する理由は、構文自体からの抑圧 (coercion) にあると考えられる。抑圧とは、構文が構文を成す語彙の意味に対する作用である。この作用によって語彙の意味では変化が引き起こされる。「被自杀」における自殺は自動詞でありながら、「脅迫を受け、自殺を余儀なくされた」または「本当は殺害されたのに自殺に見せかけられる」、「被广告」における広告は名詞でありながら、「広告を見たくなくても、仕方がなく見せられる」、「被富裕」「被贫穷」における「富裕」と「贫穷」は形容詞でありながら、不本意で「富裕層として扱われる」「貧困層として扱われる」という意味を表すことになる。これらの自動詞、名詞、形容詞はまるで他動詞のような振る舞いをする印象を受けている。

そのため、「被○○」構文における「被」は、他動詞以外の品詞をまるで他動詞のように使用させる能力があるということに帰結する。この能力があるからこそ、「被」の後に多様な品詞の出現を確保できることになる。対照的に、「直接受身」構文における「被」はこの能を持っていないため、他動詞のみ許容されることになる。なお、品詞 (または統語範疇) や語彙の意味によって、構文の抑圧が名詞・形容詞 > 自動詞 > 他動詞というように、階層 (hierarchy) を成している (王 2011 参照)。

<sup>6</sup> 検索した辞書は参考資料に羅列している。

しかし、「直接受身」構文では許容されないタイプの他動詞の場合には注意する必要がある。現代中国語では、他動詞であっても直接受身にならない他動詞がある。たとえば、「代表」「培训」「统计」などの他動詞を直接受身にすると、「??学校被他代表了」(学校は彼によって代表された)「??我们被他培训了」(わたしたちは、彼からトレーニングを受けた)「??今年的国民生产总值被商务部统计了」(今年の国民総生産は経産省による統計が発表された)となり、文脈があれば、容認度が上がるかもしれないが、文脈がない場合、容認度がかなり低い。これらの文は、「直接受身」構文として不自然な代わりに、多少「被○○」構文の色彩を帯びることになっている。すなわち、「被○○」構文の出現に伴って、もともと「直接受身」構文として容認されにくいものが、直感的に「被○○」構文として判断されやすくなり、「被○○」構文の意味として理解される傾向がある。「我们学校被他代表了」中の「被他代表」は、すでに「被○○」構文の意味を備えていると言ってもよからう。

もし「被他代表」は「被○○」構文の意味を備えているとしたら、「被他代表」と「被代表」の違いは、前者は動作主「他」(彼)が出現しているが、後者は出現していない点にある。事実上、動作主が出現しないというのが「被○○」構文のもう一つの特徴である。しかし「被○○」構文からの抑圧によって「被」の後の品詞が他動詞のように振る舞うということから、動作主の出現が可能となる。なお、「直接受身」構文における動作主は出現しても良いし、出現しなくても良いということを含めて考えてみれば、「被○○」構文における動作主は出現しないという「パラメータ」を設定しただけであろう。要するに、本研究の観点は、「被○○」構文における動作主が通常出現しないが、出現してはいけないということはない。ただし、出現できるか否かは、理論上二つの条件を満たす必要があると考えている。

第1の条件は「○○」部分の品詞(または統語範疇)である。品詞によって、動作主の出現が一定の階層性を持つ。たとえば、「被自杀」の場合、「○○」の部分は自動詞であるため、動作主が出現できない。

第2の条件は、「被○○」構文の意味を保たねばならないのである。この二つの条件にしたがって、動詞をさらに二つのタイプに分けて考える必要がある。

タイプIは、動作主が出現すれば、「被○○」構文の意味を失ってしまい、「直接受身」構文の意味に還元(regression)されるタイプの動詞である。このタイプの動詞の場合、「直接受身」構文の意味と「被○○」構文の意味は相補分布(complementary distribution)となっている。つまり、動作主があれば、「直接受身」構文の意味であり、動作主がなければ、「被○○」構文の意味である。

「录取」(合格する)はタイプIの動詞である。「被录取」の動作主「大学」を補うと、「被大学录取」(大学に受かる<sup>7</sup>)になり、「被○○」構文の意味が完全に失われてしまい、「直接受身」構文の意味に還元される。「被○○」構文の意味としての「被录取」は、入学試験を受けたことがないのに、大学に受かったと言われることを意味し、通常「偽りの情報」を利用する振り込め詐欺のことを指している。そのため、このタイプの動詞は、動作主が出現しない。

タイプIIは、動作主が出現しても、「被○○」構文の意味を保つことができる動詞であり、「代表」(代表する)はタイプIIの動詞である。前述のように、「被他代表」は直接受身として容認度

<sup>7</sup> 日本語の場合に、「大学に」は動作主ではなく補語として扱われている。「被大学录取」を直訳すれば、「大学に合格される」となる。

が低い、「被〇〇」構文の出現に伴って、直感的に「被〇〇」構文として理解される傾向があるため、タイプⅡの動詞は、動作主の出現が可能であると考えられる。

以上述べた内容をまとめて、「〇〇」部分が自動詞以外に、「被〇〇」構文の意味として理解される場合に、動作主の出現が許されるという仮説を立てることができよう。この仮説に基づいて、「被健康」(病気なのに健康のように扱われる)は、皮肉な表現として「我被(专家)健康了」(私は(専門家に)健康のように扱われた)、非事実の意味合いが含まれる「被繁荣」は「中国被(世界)繁荣了」(中国は(実際にそんなに繁荣していないのに世界各国に)繁荣しているように見なされた)のように、それぞれ動作主を補うことができる。動作主が出現しても、「被〇〇」構文の意味として理解される。

また、動作主の出現によって、「被〇〇」構文の伝達する事象の側面が微妙に異なってくるという問題にも目を向けるべきである。鐘・孫(2010)は「“被 XX”结构不仅强调受事经历了施事的某一动作,更多的表达是受事经历了施事实施的动作行为后所处于的一种状态」(「被〇〇」構文は、被動作主(patient)がある動作の影響を蒙ることを表すだけでなく、その影響を蒙った後の状態の存続をも強調するのである)と述べている。そのため、同じ「被〇〇」構文ではあるが、動作主の出現によって、強調される側面が異なってくるのではないかと思われる。「中国被繁荣了」は目下のところの中国の状態を強調するという語感があるが、「中国被世界繁荣了」は事実を述べるという語感が強い。

もちろん、「被〇〇」構文における動作主が出現可能か否かという仮説の正確さはウェブ検索やコーパスを用いて実証したり、これから「被〇〇」構文がさらに動作主を補う傾向に向かって変化していくかを観察したりしなければならない。少なくとも仮説の段階では動作主の出現が可能だと予測でき、なおかつ、出現の階層性は自動詞(出現不可) > 他動詞(一部の他動詞が出現可能・省略可能) > 名詞・形容詞(出現可能・省略可能)というようになっているのではないかと考えている。

### 3 「被〇〇」構文と「直接受身」構文の意味上の相違

古典中国語の直接受身の使い方を受け継ぎ、さらなる拡張や発展を経て、現代中国語の直接受身に至っている。「被」は本来「被子」(布団)の意味で、名詞であった。その後、動詞になり、「こうむる」「被る」「遭う」などの意味を表すようになった。「こうむる」「被る」の意味からの影響を受け、古典中国語の直接受身にはマイナスなニュアンスが含まれる(例文(1)と(2)参照)。しかし、長い時を経て、現代中国語における「被」は単純な受身標識となり、マイナス的なニュアンスが薄くなり、マイナスなニュアンスはもちろん表せるが、中立的なニュアンスも表せることになっている。中立的なニュアンスを表す傾向は、唐および宋の時代に端を発したのである。たとえば、次のような例がある。

(12) 神宗上仙，被詔至福寧殿說法。(禪林僧寶傳·卷第二十六)

神宗上仙は、福寧殿まで呼ばれ、説法を求められる。

(13) 她也许是被希望鼓舞着，也许是被焦虑折磨着，她自己也不能明确地知道。(巴金·《春》)

希望に支えられているか、それとも不安に悩まされるかが、彼女自身もよくわかっていない。(巴金·『春』)

(12)における「呼ばれる」は中立的なニュアンスである。(13)における「被希望鼓舞」はプ

ラスな、「被焦虑折磨」はマイナスなニュアンスであり、両者は正反対なニュアンスである。このことから、現代中国語における「被」そのものは単に受身標識にすぎなく、ニュアンスを帯びていないことがわかる。しかし、日本語の「使役受身」や「第三者の受身」と同様に、「被〇〇」構文が動作主による動作やある事態の影響によって、被動作主が迷惑、不利益、被害を蒙るというマイナスなニュアンスを表すことは、一般的である。

このような「迷惑受身」や「被害受身」という特徴は構文自体からの抑圧によって、「被〇〇」構文のカテゴリー属性に変化があったことに起因すると思われる。認知言語学ではこの変化を非カテゴリー化と呼んでいる。非カテゴリー化とは、一定の条件を満たせば、カテゴリー内の要素が、あるカテゴリーの属性や特徴を失うことを指す。非カテゴリー化を経て、「被〇〇」構文は「直接受身」構文で表せない意味を表すことができるようになってきている。「被〇〇」構文の表す意味は主に以下の a. b. c. の三つである（駱 2015 参照）。

- a. 「不本意」な行為を表す。「被」の後ろの動作は動作主によって発されるものの、外側の何らかの力や脅威などによって、止むを得ず行った不本意な動作である。たとえば、以下のような例がある。

(14) 教师节到来之际，湖南长沙县教师网上反映“被捐款”的声音引起了各方的重视。网友质疑，原本出于自愿的捐款为何要用“红头文件”强制规定？（《京华时报》2011.9.6）

教師の日に当たって、湖南省長沙県の教師が、寄付させられたことを投稿し、注目を集めた。インターネットユーザーは、もともと自分の意思で決めた寄付がなぜ規則で強制されるのかと疑問視している。（『京華時報』2011.9.6）

(15) 正像京沪等高铁线的开通一样，很多公众对此的反应并不是欢呼速度的提升，反倒是担忧“被高铁”，因一些既有的线路无法再选择，而不得不花更高的成本去坐价格昂贵的高铁。（《国际金融报》2012.12.26）

京滬（北京から上海までの）高速鉄道などの開通と同様に、電車のスピードが速くなったことは喜ばず、民衆は高速鉄道に乗らせられることが却って心配している。なぜなら、在来線がなくなるにつれて、値段の高い高速鉄道しか利用できなくなるからである。

（『國際金融新聞』2012.12.26）

(14) 「被捐款」は、事実上教師たちは寄付はしたが、「規定によって寄付しなければならないので、止むを得ず寄付した」という意味である。(15) 「被高铁」は、ほかに運行する交通機関がないので、「高速鉄道を利用するしかない」という意味である。動作主の意志に反しているとはいえ、動作は確実に実行したのである。

- b. 「承認されない」事態を表す。「被」の後ろの状況や事態は多くの人に承認されなかつたり、特に被動作主に承認されなかつたりする意味を表す。たとえば、次のような例がある。

(16) 评价幸福，要始终坚持“人民说了算”，不能“被幸福”。（《东方早报》2011.1.7）

幸せであるか否かは、国民によって決められなければいけない。（実際に幸せではないのに）「幸せのように扱われる」わけにはいかない。（『東方早報』2011.1.7）

(17) 给群众办实事、办好事，不能让群众处在“被代表”、“被作主”的地位，关键是看群众认不认可、买不买账。（《人民日报》2012.12.18）

国民に利益をもたらすことをすべきであり、「(国民の意見などが勝手に一部の人のみによって) 代表され」たり、「(どうすればいいか勝手に国民の代わりに一部の人のみによって) 代表され」たり、

だけによって) 決められ」たりしてはいけない。国民は納得しているかどうか、承認を得ているかどうかを考えねばならない。(『人民日報』2012. 12. 18)

(16) における「被幸福」は、幸せを唱えても多くの人から「幸福」が感じられていないことや認められていないことを意味する。また、(17) における「被代表」「被作主」は、多くの国民の意見を代表していると唱えても、多くの国民に承認されていない意味を表す。b. の「承認されない」という意味は a. の「不本意」と異なり、必ずしも一致が見られない状況や事態などを表している。

c. 「非事実」を表す。「被」の後の動作や事態などが確認されていない、または事実ではない作り話やデマを表す。たとえば、次のような例が出現している。

(18) 最近的娱乐圈，假新闻层出不穷。一会儿，张靓颖“被结婚”了。再一会儿，白岩松“被自杀”了。没多久，杨振宁妻子翁帆又“被怀孕”了。(《京华时报》2009. 11. 2)

最近芸能界では、作り話が相次いでいる。張靚穎が(結婚していないのに)「結婚した」と伝えられ、また白岩松が(自殺していないのに)「自殺した」と伝えられ、今度は楊振寧の奥さんの翁帆が(妊娠していないのに)「妊娠した」と伝えられた。

(『京華時報』2009. 11. 2)

(19) 从“被就业”牵扯出的高校就业率造假，到各种大学排行榜背后的利益链条，种种事件都反映着教育功利化的迷思。(《人民日报》2011. 7. 4)

(就職していないのに)「就職した」として行われる。大学の就職率データの改ざんから大学ランキングの背後にある利益集団の連鎖までいろいろな事件が教育の功利化への迷いを反映している。(『人民日報』2011. 7. 4)

(18) における「被结婚」「被自杀」「被怀孕」は作り話であり、存在しない事件であるという意味を表す。(19) における「被就业」も就職率データの改ざんの結果であり、事実通りに就職率を反映していないという意味である。

以上の a. 「不本意な動作」 b. 「承認されない事態や状況」 c. 「非事実」という三つの意味から、「被〇〇」構文は「直接受身」構文より、ずっと複雑な意味を持つことがわかる。なお、この三つの意味は「受動→不本意→承認されない→非事実」という意味拡張を経ている。その結果、陳述された事実も「事実→一致が見られない事実→非事実」という変化を経ている。非カテゴリー化した結果、受身標識が保留されるものの、「直接受身」構文におけるその中立属性が失われ、「迷惑」「被害」専用の受身表現となっている。

## 4 「被〇〇」構文と日本語の受身表現

### 4.1 日本語の受身表現と中国語の受身表現

第2節と第3節では、直接受身と対照しながら、中国語における「被〇〇」構文の構成要素および意味などを述べた。抑圧による非カテゴリー化を通して、従来の「直接受身」構文の持たない独特な意味を表すことができるようになってきている。構文という視点から見ると、中国語の受身表現は英語に近く、「直接受身」構文で受身表現を示す傾向がある。一方、日本語の受身表現は多様な構文を取ることによって、多様な意味を表すことが可能となっている。そのため、「被〇〇」構文の位置づけについては、日本語の受身表現と対照してみると、よりよくわかってくるのではないかと考えられる。中国語における受身表現と日本語における受身表現の対照研究は数多く行



われている（杉村 2003、楊 2004、邱 2013、李 2013 など）。本研究では構文の視点から、改めて整理することを試みる。日本語と中国語の受身表現の分類を概観しておきたい。

日本語の受身は直接受身と間接受身に大別される（寺村 1982 参照）。間接受身を「持ち主受身」と「第三者の受身」に分けられる（鈴木 1972、仁田 2009 参照）。この三種類の他に、「自発的受身」（仁田 2009）、「非情受身」（田中 2002）がある。さらに、動詞の語幹に「- (a) se-rare」をつける「使役受身」が存在する。Goldberg（1995）の定義にしたがって、この六つの受身タイプは文の構成要素および文全体の表す意味が異なるため、それぞれ異なる構文と見なすことができよう。

中国語の受身表現も直接受身と間接受身に大別される。Huang et. al (2009) は間接受身をさらに「possessive passive」と「adversative passive」に分けている。前者は「我被小张打了头」<sup>8</sup>（私は張さんに頭を殴られた）のような文、後者は「我又被他击出了一只全垒打」<sup>9</sup>（私はまた彼にホームランを打たれた）のような文を指す。前者は日本語の「持ち主受身」に相当し、後者は日本語の「第三者の受身」に相当するように見えるが、あくまで類型論的には異なるタイプの言語であるため、完全に対応・一致することがない。表 1 で示したように、日本語の「持ち主受身」を「possessive passive」に訳す場合、必ずしも文法的な中国語文にならなく、「第三者の受身」をそのまま「exclusive indirect passive」に訳すと、容認度がかなり落ちたり、非文となったりすることになる（邱 2013 参照）。

また、「故郷のことが懐かしく思い出される」<sup>10</sup>のような「自発的受身」の場合に、中国語は受身を取るのではなく、能動文「(私は) 故郷のことを懐かしく思い出す」で表現しなければならない。「五輪は東京で開催される」という「非情受身」も同様に、中国語は受身表現を取らずに、受身標識「被」が出現すれば、非文として判断されてしまう。「私は母にピアノを練習させられた」という「使役受身」は、そもそも中国語にはないため、別の表現で訳さねばならない。結局、比較的日本語の受身表現と対応・一致している中国語の受身表現は、直接受身しかないと言ってもよからう<sup>11</sup>。

表 2 からわかるように、日本語は多様な受身の意味や異なる受身表現を使用する場面、背景情報などを、多様な受身構文を用いて表している。中国語は日本語ほど豊富な受身構文を持たないため、異なる表現と構文で訳さねばならないことになる。結果として、直接受身以外の受身表現は一部しか対応・一致が見られないこと、もしくは完全に対応・一致が見られないことがなされている。このことを踏まえて、中国語の「被○○」構文の出現はある意味必要性があると考えられる。言い換えれば、その場面や背景情報、特別な意味を持つ受身表現がもともと存在しなかったため、あえて表現したければ、新しい受身表現を作り出さねば、他に方法がなからう。

---

<sup>8</sup> 邱（2013）の例である。

<sup>9</sup> Huang et. al (2009) の例である。

<sup>10</sup> 仁田（2009）の例である。

<sup>11</sup> 場合によって、一致しない例も見られる（邱 2013 参照）。

表2 日本語と中国語の受身表現の比較

受身のタイプ	日本語	中国語	中国語の容認度
直接受身	洋平が広志に殴られた。	洋平被广志打了。	○
第三者の受身	私は担任の先生に息子を叱られた。	我被班主任骂了儿子。	?? / *
	私は広志に犬を殺された。	我被广志杀了狗。	?? / *
持ち主受身	私は花子さんに頭を殴られた。	我被花子打了头。	○
	私は先生に論文を批判された。	我被老师批评了论文。	*
自発的受身	故郷のことが懐かしく思い出される。	故乡被很怀念地想起。	*
非情受身	五輪は東京で開催される。	奥运会在东京被举办。	*
使役受身	私は母にピアノを練習させられた。	我被母亲让练习了钢琴。	*

日本語の受身表現と対照してみると、興味深いことが二つ見られる。一つは、第3節でも述べたように、「被○○」構文は三つの意味を持っている。三つの意味の間に連続性があるとはいえ、実際に文脈や背景情報を踏まえて、三つの意味の中から一つが聞き手に選ばれて、理解されている。この点は日本語とかなり異なる。日本語の場合、六つの受身構文をも用いて、それぞれ異なる意味を聞き手に伝えているが、三つの異なる意味が一つの構文に「収斂」することはない。

もう一つは、「被○○」と「第三者の受身」は共に「被害」の受身であるが<sup>12</sup>、両者の「仕組み」がかなり異なる。例えば、「被健康」という「被○○」構文には、「自分自身が健康だと主張するのではなく、単に（医者に）そう言われるだけだ」という文脈や背景情報が構文に組み込まれており、「被害」の意味合いがむしろ背景情報によって表されている。にもかかわらず、これらの情報は文面に現れることも補うこともできない。「（私は）一晩中隣の子に泣かれた」とような「第三者の受身」の場合、「一晩中隣の子に泣かれて、眠れなかった」と言うべきところを日本語では後件を省略してしまうことが多い。「被害」の意味合いがむしろ「眠れなかった」という明言されない出来事の「結果」によって表されている。しかし、「被○○」構文に組み込まれた背景情報と異なり、「第三者の受身」では後件の「眠れなかった」という「結果」が省略されてもよく、文面に出られ、補われることもできる。

日本語と中国語では、話し手と聞き手の共有する情報や知識、常識であれば、明示しなくても良い。「第三者の受身」のような後件の情報をあえて明示しないのとは異なり、「被○○」構文の場合、構文に組み込まれている背景情報は明示できず、話し手と聞き手の間の「暗示」的な情報や知識となる。日本語や中国語は「省略する言語文化」に属すると言われているが（林 2014 参照）、中国語の新しい受身表現である「被○○」によって示される明示できない「暗示」的な情報および「第三者の受身」によって示される明示しない情報による言語現象は、「省略する言語文化」を裏付ける証拠となる。

#### 4.2 「被○○」構文の意味に近似する日本語の受身表現

前節では、構文の視点から日本語と中国語の受身表現がどのくらい対応・一致しているかを述

<sup>12</sup> 「被○○」構文は「被害」の受身であるが、「第三者の受身」には「被害」を表さない場合が見られるが（私は担任の先生に息子を褒められた）、本研究では便宜上「被害」の受身として扱う。

べた上で、日本語の受身構文から見る「被〇〇」構文の興味深い二つの事実を述べた。本節では、「被〇〇」の三つの意味はそれぞれどの日本語の受身構文に似ているかを検討しながら、「被〇〇」構文の特質を考察していきたい。

まず、「動作主は外側の何らかの力や脅威などによって、止むを得ず行った不本意な動作を行った」という意味を表す場合に、構文全体の意味は日本語の使役受身に近い。「被捐款」は「寄付させられる」とほぼ同義である。つまり、ある行為が強制的に行われ、被使役者側が迷惑などを感じている際に使用する。次に「多くの人に承認されなかったり、特に動作主に承認されなかったりする事態や状況である」という意味を表す場合に、日本語には相当する受身がなく、構文に組み込まれた文脈や背景情報などを明示して訳す必要がある。また、「動作や事態などが確認されていない、または事実ではない」という意味を表す場合も、日本語には相当する受身がない。

次に、構文の意味から日本語と比較すると、非カテゴリー化を経て、「被」という受身標識が保ってはいるが、「不本意な動作」以外の意味はもはや単純な「受身」の意味から離脱し、命題自身の真偽などに関わる、むしろ英語の仮定法に近い役割を果たしている。その代わりに、日本語の様々な受身構文は、基本的に「受身」の意味を保ちながら、むしろ細い使用場面や伝わる意味によってそれぞれ使い分けていると言えよう。

## 5 まとめと今後の課題

本研究では、中国語における新しい「被〇〇」パターンを取る表現を認知言語学上の構文として扱い、中国語の「直接受身」構文および日本語の受身表現と対照し、その構成要素、意味を中心に検討した。その結果、カテゴリー化を通して、「直接受身」構文から「被〇〇」構文という新しい受身表現が作り出され、従来の受身表現で表せない意味を表している。また、日本語の受身表現と対照してみた結果、「被〇〇」の意味の一つは「使役受身」に近似し、文脈や背景情報が構文中に組み込まれるという点は「第三者の受身」に近似することがわかった。

「被〇〇」構文は2007年初めて現れたと言われ、2011年までの間に盛んに使われた。これらの「被〇〇」表現が数多く作り出され、広く受け入れてきている。2015年に入っても、「被〇〇」構文は相変わらず多用されている。例えば、山東省のある男子の身分情報が盗用され、本人が事情を知らないまま、人の「父親」になってしまった事件がある。この事件によって「被当爹」（その人の父親ではないのに、父親扱いされた）という「被〇〇」表現ができた<sup>13</sup>。また、河南省少林寺が上場するという噂が何度も流れたことがあるから、「被上市」（上場していないのに、人に上場すると言われる）という表現が作られた<sup>14</sup>。とりわけ、2015年8月12日に、天津市で重大な化学製品爆発事件が発生した後、市上層部の判断ミスによって、極めて危険な状況にもかかわらず、無理矢理消防隊員を爆発地域に突入させたり、消火作業をさせたりした。結果として、10人以上の消防隊員が命を落としてしまったことから、「被送死」（無駄に死なせられる）という表現が作られた<sup>15</sup>。

しかし、あくまで「被〇〇」構文は、中国語における既存する受身表現とは大いに異なるだけでなく、前述のように構文に組み込まれる文脈や背景情報がある。それに特定の事件や事実、事

<sup>13</sup> 光明網 [http://life.gmw.cn/2015-09/01/content\\_16893987.htm](http://life.gmw.cn/2015-09/01/content_16893987.htm) 2015.9.1

<sup>14</sup> 騰訊網 [http://news.qq.com/a/20150820/048055\\_all.htm](http://news.qq.com/a/20150820/048055_all.htm) 2015.8.20

<sup>15</sup> 網易新聞 <http://news.163.com/15/0816/09/B14M2SE900014AED.html> 2015.8.16

態、人物、状況との関連性が強いと、これらの情報を持たない人または特定の事件などを知らなければ、構文の意味を理解しにくい。この面を含めて考えれば、目下のところ盛んに使われていても、だんだん使用頻度が下がっていくことが予想される。とはいえ、言葉は社会の発展や矛盾の鏡であり、社会の現状などを反映していると言える。ある社会が発展し続けるのなら、または矛盾があり続けるのなら、何らかの形で言葉に反映されるであろう。本研究での構文の立場から取り上げた仮説も、これからの「被〇〇」がどのような様相を呈するのか、また使われ続けるのか、それともだんだん消滅していくのかなどに関しては、さらなる考察が必要となり、今後の課題としたい。

### 【参考資料】

- 《2006汉语新词语》 商务印书馆：北京    《2007汉语新词语》 商务印书馆：北京  
 《2008汉语新词语》 商务印书馆：北京    《2009汉语新词语》 商务印书馆：北京  
 《2010汉语新词语》 商务印书馆：北京    《2011汉语新词语》 商务印书馆：北京  
 《2012汉语新词语》 商务印书馆：北京    《2013汉语新词语》 商务印书馆：北京

### 【参考文献】

- 王力（1980）『漢語史稿』中華書局  
 王寅（2011）「“被新字构式”的词汇压制解析—对“被自愿”一类新表达的认知构式语法研究」  
 『外国語』第34卷第3期，13-20.  
 何洪峰・彭吉（2010）「论2009年度热词“被X”」『语言文字应用』第3期，81-88.  
 邱林燕（2013）「中国語と日本語との受身の考察（1）：中国語の場合」『国際広報メディア・観光学ジャーナル(The Journal of International Media, Communication, and Tourism Studies)（北海道大学）』16，65-84.  
 施春宏（2013）「新“被”字式的生成机制、语义理解及语用效应」『当代修辞学』第1期，12-28.  
 鐘守満・孫崇飛（2010）「“被XX”结构语法语义认知分析」『江西教育学院学报』（社会科学）第31卷第4期，55-58.  
 杉村博文（2003）「从日语的角度看汉语被动句的特点」『语言文字应用』教育部语言文字应用研究所，64-76.  
 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』麦書房  
 田中道治（2002）「非情受身とその類似機能表現」『Journal of the Faculty of Humanities and Social Science, Toyama University of International Studies（富山大学）』2，93-101  
 寺村秀夫（1982）『日本語の意味とシンタクスI』くろしお出版  
 陳博文（2010）「汉语新型“被+X”结构的语义认知解读」『当代修辞学』第4期，80-84.  
 丁力（2011）「变异“被”字句的异质感受与文化信息」『汉语学报』第4期，53-58.  
 仁田義雄（2009）『日本語の文法カテゴリをめぐって』ひつじ書房  
 林伸一（2014）『「省略する言語文化」と『明示する言語文化』-暗黙知、明示知、『見える化』についての考察』『異文化研究』山口大学人文学部異文化交流研究施設，第8号，1-13.  
 楊淑萍（2004）「日中両語における間接受動態についての一考察」『南亞學報』第二十四期，194-203  
 楊炎華（2013）「“被+XX”的句法化及其词汇化」『汉语学习』第3期，60-68.

- 駱牛牛 (2015)「论词素义的非范畴化」『山东大学学报』(哲学社会科学版)第3期, 126-131.
- 李湘琴 (2013)「日本語と中国語の受身文の対照研究-網羅的な記述を目指して-」『言語文化学研究 (Journal of language and culture) (大阪府立大学)』(8), 87-105.
- 劉雲 (2010)「新兴的“被X”词族探微」『华中师范大学学报』(人文社会科学版)第5期, 93-94.
- C.-T. James. Huang, Y.-H. Audrey Li, Yafei Li. 2009. *The syntax of Chinese*, Cambridge University Press.
- Evans, V. 2006. Lexical concepts, cognitive models and meaning-construction. *Cognitive Linguistics*, 17 (4), 491-534.
- Goldberg, A.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.

## 謝辞

本研究は、林伸一先生からの貴重なご意見をいただきながら、修正を加え作成してきました。心より感謝の意を込めてお礼申し上げます。

第一著者の修士時代の指導教員である林先生は、平成28年3月をもちまして、定年退職なさいます。3年前、修士1年生であった第一著者に、研究課題の設定から論文の仕組みや書き方まで、懇切丁寧に指導して下さった林先生の姿を今でも鮮明に覚えています。また、学部授業のティーチングアシスタント、「日本語教育能力検定試験」に関する公開講座のアシスタントとして働いたこと、授業で自分の研究や論文を学部生や大学院生を前に発表したことなど、懐かしい思い出です。林先生のもとで身につけたものや積んだ経験などが、博士後期課程においてもとても役に立っています。とりわけ、研究課題に関しては、修士時代の理論研究を踏まえて、博士後期課程で心理言語学的なアプローチで実証的な研究を行っています。これも三上章の著作を読んで、林先生と何回も相談を重ねて決めたものです。振り返ってみますと、改めて林先生に深くお礼を申し上げたいと思います。

第二著者も、山口大学に留学した際の歓迎会で、初めて林先生にお会いしました。その後、林先生の「日本語学特殊講義」という授業で、学部生や大学院生の研究発表や調査に参加しました。構成的グループエンカウンターについては、林先生の授業で初めて見聞きし、「リフレーミング」などの用語が強く印象に残っています。今、外国人に中国語を教えている第二著者にとって、林先生の「留学生のための専門日本語補講」への参加は、貴重な経験でした。とりわけ、林先生の授業の進め方はいい刺激と示唆となっています。第二著者も、中国語の授業で、なるべくより多くの学生からの発言が得られるよう励んでいます。

また、林先生は日本語教育のみならず、言語学、異文化に対しても興味関心をお持ちになり、異文化に関する論文も作成していらっしゃいます。本研究は語学寄りではありますが、「被○○」構文を通して、文化的側面を多少反映していると思われます。

ここに敬意を込めて、本研究を林伸一先生の定年退職のお祝いといたします。